

防災研究所公開講演会 ③A

- 日 時：10月24日(土) 10:00～12:00
- 会 場：宇治おうばくプラザ1階 きはだホール
- 定 員：300名

■プログラム

世界の安全を守る建築防災工学

10:00～11:00 「世界各地における自然災害に対応した構造デザイン」

Schlaich Bergermann und Partner, Stuttgart Germany 構造士 玉井 宏 樹

講演要旨：構造設計技士に国境はない。基準法はちがえども、力学的原理に基づく原理は世界共通のはず。そんな基本原理を応用することで、世界で仕事ができる。これが技術者や科学者の愉しみですね。大学在学中は未知なる自然現象、いまは未知の設計対象という違いがあり、現在の職場では比較的特殊な物件に従事する機会が多いのですが、そこでも基礎力が存分に発揮できていると自負しています。大学で学ぶもっとも大事なことは基礎力です。基礎力さえしっかりとやしておけば、将来どのような職能を選んでも、常に自ら学び応用できるでしょう。講演では、バブルではじけた超高層、特殊軽量構造物の形状決定、あるいは昨今よく耳にするフリーフォームシェルの系譜など、スライドとともに、防災研で培った基礎力の応用が問題解決の糸口になった事例などを織り交ぜながら、お話したいと思います。



ヤスマリーナホテルの建設現場

11:00～12:00 「様々な立場からの防災への貢献：

国連、政府、学術、NGO、企業、コミュニティ」

東北大学災害科学国際研究所 特任准教授 泉 貴 子

講演要旨：これまで、防災という災害が起こる前の事前準備以上に、災害が起こった後の災害対応・復興活動に対して支援や予算が多く寄せられていました。その概念が、2004年のスマトラ沖地震・インド洋大津波、2005年の第2回国連世界防災会議で採択された「兵庫行動枠組」によって徐々に変化を見せ始めました。国際・地域レベルで防災への取り組みが強化され、それに従事する組織や機関も増加しました。特に、企業や学術の防災への貢献は注目されています。2015年3月の第3回国連世界防災会議では、あらたに「仙台防災枠組」が採択され、新しい防災の実践という目標が掲げられました。これから2030年までに国際社会が目指そうとしている防災戦略・対策とは何かについてお話します。また、異なる機関やレベルでの防災対策に関する事例もアジアから紹介します。



国際機関からの援助で設置されたテント村
(2004年インド洋津波災害、バンダ・アチェ、インドネシア)